

「うらみ」研究の概観と今後の課題

修士課程 1 年	鈴	木	拓	朗
修士課程 1 年	荻	原		萌
博士課程 1 年	糸	山	恵	未
教授	下	山	晴	彦

1. 問題と目的

「うらみ」とは何であるか。日常的に使用される言葉であるだけに、その意味について深く考える機会は少ないように思える。「うらみ」という言葉は、特に報道の中で耳にすることが多いのではないか。例えば、2016 年 7 月に発生した、20 代のパレエ講師が指を切断された事件において、逮捕された男は恨みの感情を持ち続けた末に事件を起こしたと述べている（時事通信社、2016 年 11 月 7 日）。このように、暴力犯罪の加害者の動機として「うらみ」が語られることは少なくない。

臨床心理学領域においても、昨今注目が集まっているいじめ問題に関して「うらみ」の関連が指摘されている。朝倉(2004)は、いじめ加害者の特徴として、恨みといった他者への敵意的攻撃性を向けやすいことを報告している。さらに、加害者だけでなく被害者が抱く「うらみ」についても指摘する見解が多くある(例えば、塩谷(1997)など)。福島(1985)では、「いじめられたから、いじめ」するという構図があることを指摘し、いじめの被害者が別の弱い相手を対象として、昔いじめられた「恨み」を晴らしていると説明している。また、竹内・戸田・高橋(2015)では、いじめ被害者に適切なアフターケアをしないと、その子たちが学校に恨みを持って復讐しにいき、子どもと先生を殺して自分も死ぬという悲劇が起き得ると指摘されている。「うらみ」の対象はいじめの加害者だけにとどまらない可能性があり、二者関係を越えて問題が拡大していく恐れがあるといえよう。

このように、「うらみ」は犯罪やいじめといった社会問題の発生要因の一つであることが考えられ、その特徴や影響を解明することは問題解決やその予防にとって非常に重要な課題である。そこで、本研究では、「うらみ」に関する先行研究を概観し、現在報告されている「うらみ」の定義や特徴を整理する。さらに、インタビューデータ

に基づいて「うらみ」の構造を分析し、先行研究で得られた知見との比較検討を行う。

2. 「うらみ」の定義と様相

「うらみ」の定義や様相を捉えるために、現在までに報告されている知見について整理していく。「うらみ」の辞書的な意味については、Table. 1 にまとめたので参照されたい。

学術研究において、「うらみ」の定義や特徴については、数は少ないもののいくつかの文献において提唱されている。特に体系的に述べられているものとして郷古(1976；1978)と山野(1989)がある。郷古(1978)では、「うらみ」の本質的な要素として、1.相手の仕打ちに不満を持つ、2.表立ってやり返せない、3.その相手の気持を推量できず、いつまでも執着し、じっと相手の本心や出方をうかがう」が挙げられており、これらは一つの心理的過程を表しているとされている。また、ここでは「うらみ」は代理的对象に向けられることがあり、対象の置き換えや般化が生じ得るとされている。さらに、「うらみ」は攻撃的感情でありながらあくまで受動的・受身的であると指摘されており、この受身性は日本人の特性であるとも指摘されている(荒木、1976)。加えて、郷古(1976)は、受動的憎悪から隠忍の果て攻撃へと転ずる過程を「恨み」とし、「恨み」には攻撃行動も含まれていることを強調している。

一方、山野(1989)では「うらみ」を「他者から受けた不当な仕打ちを不当と思い、不快感を抱きながらも、相手の実力や本心や出方が推測できないため、強い報復欲求を抑制し、いつまでもそれに執着しながら辛抱し続ける苦しさを基調として発現する感情もしくは情念」と定義している。また、「うらみ」は弱者が抱きやすい感情であると述べられており、弱者なるがゆえに憎しみを主

Table. 1 「うらみ」の辞書的意味

広辞苑〔第六版〕(2008)	古語辞典〔第八版〕(1995)	日本語源広辞典 (2013)
うらみ【恨み・怨み・憾み】①うらむこと。にくいと思うこと。②不満に思うこと。残念に思うこと。◇「怨」は、特に感情が強い時に好んで使われる傾向がある。②は多く「憾」を使う。	うらみ【恨み・怨み】(名) 1. 恨むこと。憎く思うこと。2. 残念に思うこと。未練。3. 嘆き。悲しみ。4. さびしうに鳴く虫の音。	うらむ【恨む・憾む】 語源は「ウラ(心) + ム」。相手に不満を持ちながら、相手の心をじっと見ている意。▼中国語源【恨】…心の中に、いつまでも、根に持つ。「心+良(コン・根)」。▼中国語源【憾】…うらむ。心に残る。「心+感(大きな刺激)」特に悪い事が起こった心情。
うらむ【恨む・怨む・憾む】他からの仕打ちを不当と思いながら、その気持ちをはかりかね、また仕返しでもできず、忘れずに心にかけている意。①(相手の仕打ちを)不快・不満に思う。また、くやしくのろわしく思う。②恨み言を言う。かきくどく。《憾》遺憾に思う。残念に思う。④恨みを晴らす。仕返しをする。	うらむ【恨む・怨む】〔語源は「うら見る」からという。「うら」は心の意〕一(他マ上二) 1. 恨みに思う。憎く思う。2. 悲しむ。嘆く。3. 不平を言う。恨み言を言う。4. 恨みを晴らす。仕返しする。5. (自動詞的用法で)(虫・風などが)悲しげな音を立てる。	

体的能動的に解消できず、内にこもるほかないときに「うらみ」が生まれるとしている。さらに、他から与えられた不当な仕打ちの内容によって「うらみ」を「恨み」と「怨み」に大別している。それぞれ、①恨み：相手への甘えや一体感欲求が拒否されて生じた受動的な敵意であり、甘えとアンビバレンスな関係にある感情。②怨み：a. 相手がどうしても甘えや一体感の回復欲求に気づかないため、恨みが解消せず、その苦しさに耐えきれず害意を抱くようになった時の感情。b. パーソナルな関係がなかった相手から不当な仕打ちを受けながら直ちに報復できず害意を抱き続けている時の感情、と説明されている。

「うらみ」と甘え

土居 (1971) は、恨むのは甘えを拒否されたということと敵意を向けるためであり、単なる敵意や憎悪の表現ではなく、その裏に甘えたい気持ちを宿していると述べている。表面的な甘えは裏の恨みを防衛していることもあり、その逆もあるため、これらは表裏一体の関係であることが考えられる。一方、山野 (1989) は一体感欲求の拒絶によって「うらみ」が生じるということに注目しているが、その一体感欲求とは甘えの心的背景のことでもある。

感情研究

感情研究において、「うらみ」が扱われている研究はいくつかあるが、どれも「うらみ」を中心として扱われたものではない。例えば、寺崎他 (1992) で作成された多面的感情状態尺度においては、敵意因子を構成する項目として「うらんだ」という項目が含まれている。嫌悪感情について調査した研究においては、憎悪感情因子の項目として“Aさんに対してうらみを感じている”という項目が示されている(山本, 2003)。他にも、青年期(中学生、高校生、大学生)を対象に日頃感じている感情を調査した研究では(落合, 1994)、全190の感情の中でも「うらみ」は日常的に感じる事が比較的に少ない感情であることが示唆されている。

西欧における「うらみ」

怨みは“grudge”、“resentment”、“ill feeling”、“malice”と訳されるが、その意味合いはこれらの訳語とは異なると述べられている(Kuno, 1991)。さらに、日本人は裏に保持することを好む傾向があることや、日本人に特徴的である受身性が「うらみ」と関連していると考えられ、これは日本人に特有な概念である可能性が示唆されている(Kuno, 1991; 郷古, 1978)。しかし、「うらみ」を持つのは日本人だけではないということも指摘されており(郷古, 1978)、概念としては認識されていなくとも、現象としては日本人以外にも起き得ると考えられる。

小考察

いくつかの「うらみ」についての文献から、「うらみ」の共通要素が見えてきた。それは、他者からの不当な仕打ち、敵意・攻撃性、不快感情の持続や事柄への執着、受身性、そして甘えなどを包含する心理過程であるということである。しかし、共通要素は見られるものの、「うらみ」の定義は一貫しておらず、概念として確立されていないようである。また、定義がなされていても、実証的なデータに基づいているものではなく、臨床経験に基づいた主観的見解によるものなどであった。よって、今後は、実証研究による「うらみ」の概念整理を行い、定義を確立させる必要があると考えられる。

3. 「うらみ」の近接概念

「うらみ」は多様な感情が関連しており、複雑な概念であることが推測される。関連する多様な感情との比較を通して多角的に「うらみ」を捉えることで、その理解は一層深まると考えられる。そこで、ここでは「うらみ」の近接概念を取り上げ、「うらみ」との関連を考察していく。

攻撃性

山崎らでは(坂井・山崎, 2004; Yamasaki & Nishida, 2009)、恨みを反応的不表出性攻撃(inexpressive aggression)の一つとして述べている。反応的不表出性攻撃と

は、攻撃誘発刺激に対して怒りを感じた時、その怒りもたらす一次的反応が直接的攻撃として表に出ないのである(山崎, 2002)。「うらみ」は他者の仕打ちがきつかけとなっており、他者への敵意や害意を表出さず、辛抱したり、じっと相手の出方を伺ったりすることが特徴である(郷古, 1978; 山野, 1989)。よって、「うらみ」は反応的不表出性攻撃の一つであることが考えられる。

敵意

攻撃性の認知面として、敵意は“他者に対するネガティブな信念、恨み、猪疑心”と定義されている(山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹, 2001)。また、Buss & Durkee (1957) による Hostility-Guilt Inventory (HGI) の下位尺度である Resentment は、秦 (1990) において“恨み”と訳されている。ここでは、Resentment とは不当な扱いに対する怒りの感情であるとされており、攻撃の情緒的、態度的側面を表していると述べられている。以上から、「うらみ」は敵意を構成する概念の一つであり、攻撃性の認知的・態度的側面に位置していることが示唆される。

怒り・憎しみ

恨みは怒りの下位感情としても指摘されている(山根, 2005)。山根 (2005) は怒りの下位感情として恨みと憎しみを挙げ、憎しみは自己の損害に関わらず、社会的正義に対する強い違反者に対して起こるが、恨みは相手の違反性よりも自分の被害性が問題であるときに生じると述べている。また、恨みが生じる場面として、自分の愛が裏切られた場合が挙げられており、原状(愛情関係)回復への執着があると、愛憎のアンビバレント状態になるとも指摘されている。怒りが生ずるもっとも基本的な組み合わせの一つとして「拒絶と否定への怒り」が挙げられており(宮本, 2012)、これは「裏切り」に関わる側面であると考えられる。こういった関連性から、拒絶や否定、裏切りが「うらみ」の生起要因となっている可能性が考えられる。

妬み

妬みは「他者が自分よりもなんらかの点で有利な状況にあることを知ることによって生じる不快な感情反応」と定義されており(澤田, 2003)、「うらみ」の類縁語として位置付けられている(山野, 1989)。さらに、Tittelman (1981) から、澤田 (2005) は妬み感情を構成している感情としてうらみ(resentment)を挙げている。妬みは劣等感と関連していることが多く報告されており(Horney, 1937; Salovey & Rodin, 1985; 澤田・新井, 2002; 澤田, 2009)、弱者が抱きやすい感情であるという点で「うらみ」に通ずる感情であると考えられる(山野,

1989)。自分が相対的に弱い立場・劣位であることが、妬みと「うらみ」の共通要素であると考えられる。また、妬みの中核は自分にはないものをほしいという敵意を帯びた「願望」であるため(澤田, 2009)、敵意と関連している点においても、妬みと「うらみ」の共通した側面であると考えられる。

しかし、「うらみ」には被害性が重要であると考えられるが(郷古, 1978; 山野, 1989; 山根, 2005)、妬みの生起においてそれは必須条件ではないことが相違点であると考えられる。つまり、被害性が「うらみ」と妬みの弁別において重要であると考えられる。

許し

許しとは、「自身の感情を害することを知覚し、それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内プロセス(加藤・谷口, 2009)」のことであり、加藤・谷口 (2009) が作成した許し尺度においては、許しは寛容さ因子と恨み因子によって構成されていることが示された(加藤・谷口, 2009)。ここにおける恨み因子は許しと負の関係にあることが示唆されている。他にも、恨みの上位感情である怒りは許しの対立感情であることも指摘されているため(山根, 2005)、許しと恨みが相反する概念であることが示唆される。この恨み因子は身体的攻撃、短気、敵意そして言語的攻撃と有意に関連しているとされる(加藤・谷口, 2009)。また、許しは恨みと相反する概念である可能性が示唆されるため、怒りや怨みなどのネガティブな感情が攻撃性や復讐といった反社会的な行動へ移行することの予防に役立つと考えられている(加藤・谷口, 2009)。

Resentment

Resentment は“恨み”と訳されることがあり(秦, 1990)、ウィズダム英和辞典(第3版) (2013)によると、「憤り、憤慨、怒り(anger); 恨み」とされている。Resentment については欧米諸国において多くの研究がなされており、不公正感と関連していることが一貫して報告されている(Feather & Sherman, 2002; Feather & Nairn, 2005; Feather, 2008 a)。Resentment は怒りの一種であるが(Feather, 2008 b)、その中心は不公正感であると指摘されており(Feather & Sherman, 2002)、この点において、不当な仕打ちをきっかけに生じる「うらみ」と共通していると考えられる(山野, 1989)。しかし、resentment は他者に開かれたものであり、制裁的特徴を持つとされているため(Smith, Parrott, Ozer & Moniz, 1994)、裏に保持される傾向がある「うらみ」とはこの点で異なると考えられる(Kuno, 1991)。よって、resent-

mentと「うらみ」は、近しい概念ではあるが、異なる別の概念であることが考えられる。

小考察

「うらみ」とその近接概念との関連について見てきたが、これらをまとめたものをFigure. 1に示す。「うらみ」は敵意や怒りといった攻撃性に関わる概念と関連があると考えられる。さらに、憎しみや妬みと異なり、「うらみ」には特に被害性が重要であることが考えられる。Resentmentと「うらみ」は不公正感による怒りであることが共通しており、resentmentが「うらみ」の英訳とされる所以である可能性が示唆される。つまり、不公正感は「うらみ」において重要な要素である可能性が考えられる。また、「うらみ」の解消においては、「うらみ」と相反する概念である許しが重要な要因である可能性が考えられる。

4. 「うらみ」の構造の分析

先述の通り、「うらみ」の実証研究は寡少であり、定義も確立されていないため、まずは「うらみ」とは何であるのかという現象学的な問いに答える必要がある。そのためには、事後的に内省することによって表象された感情が最も直接体験に近いと考えられるため（山根, 2005）、「うらみ」を抱いた経験がある人の語りをもとに、その特徴を検討することが求められよう。そこで、本研究では、「うらみ」を抱いた経験についての語りをもとに、その構造や要素について検討するための予備的な調査を行う。

方法

調査対象者 『「うらみ」を抱いた経験がある人』を対象とした便宜的サンプリングを行い、調査に同意した4名（男性3名、専門学校教員、自営業、会社員；女性1名、大学院生）を対象とした。

調査方法 先行研究の知見を参考にインタビューガイドを作成し、半構造化面接を行った。インタビューガイドの内容は、『「うらみ」のきっかけ、'うらみ'の対象、感情状態、その時の行動、その時の欲求・願望』である。インタビューを行う前に、研究において説明や同意なく個人情報などのプライバシーについて公開しないことを伝達した。その上で、インタビューへの参加とその録音について了承を得た。インタビューの場所についてはプライベートが守られるよう配慮し、時間は約30分程度であった。

分析方法 インタビューにおける発言をKJ法（川喜多, 1967）を援用し分析した。分析は、臨床心理学を専攻する大学院生3名によって行われた。

結果と考察

インタビューデータの分析によって得られたカテゴリをTable. 2に示す。これらは、カテゴリとサブカテゴリ、その具体例から構成されている。

各カテゴリの説明 抽出されたカテゴリとサブカテゴリについて説明していく。以下では、カテゴリを<>、サブカテゴリを[]、インタビュー内の語りを『』で表す。

「うらみ」を抱いた対象として、<一次的对象>と<二次的对象>が得られた。<一次的对象>とは、「うらみ」をもつきっかけとなる直接的な対象のことであり、[生活空間が同じで、関わりが多い対象][生活空間は同じだが、

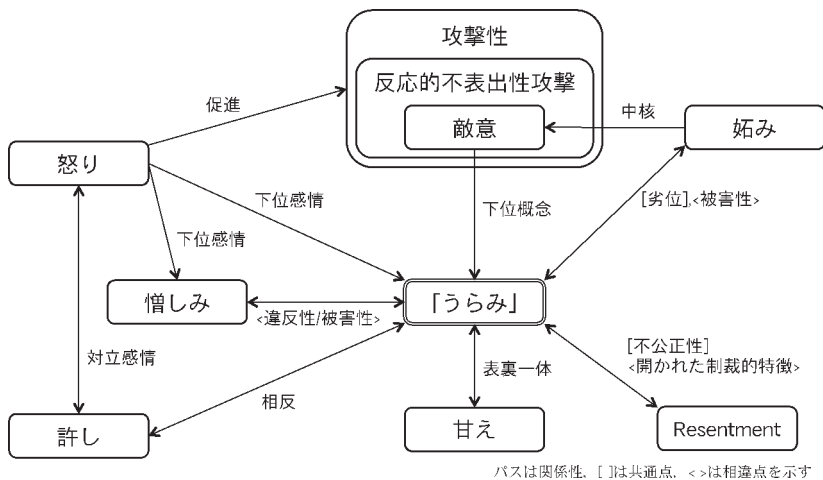


Figure. 1 「うらみ」と近接概念との関係図

Table. 2 カテゴリー一覧

カテゴリ	サブカテゴリ	例
「うらみ」 一次の対象	生活空間が同じで、関わりが多い対象	二つ前の上司、今の上司とはまた違う人なんだけど。5、6年前ぐらいかな。上についてた上司で、その人に対するうらみはさっきのとは違って、思い返すと、怒りよりも脱力感を感じる
	生活空間は同じだが、関わりが少ない対象	もともとこっちは何の感情も持っていないから。同じクラスの人ぐらい
	生活空間が異なる対象	うらみっていう観点でいうと、超ムカつくみたいな軽いノリで言うんだけど。相手はね全然知らない人なんだよ
	二次の対象	ずっと嫌な思いを抱きながら、自分の姉貴をいじめてる子どもの家族をすごい、ざっくりだけど、敵みたいな感じ
欲求不満状況	期待の裏切り	振られたからっていう…まあ、それが、そこが起点なんだろうけど、それまでは自分の気持ちを受け止めてくれました。で、そこから受け止めてくれませんっていうことで、受け止めてくれなかった
	被害体験	小学校5、6年とか中学生の時とか、みんな身体的特徴とか格差が出てきたりするじゃない？若干、嫌われたりいじめられたりすることがあって、自分自身コンプレックスもあって、ちっちゃいとか毛が濃いやとか、身体的特徴もあって若干嫌われてたりとか
「うらみ」 対象への感情	怒り	寝ても覚めてもどんな時でも思い出すんですよ。で腹がたつんだよ。で、もう何をしてても思い出しちゃうからね。自分が自分でいられなくなっちゃうようなさ、くらしいの怒りだよ
	憎しみ	倒すべき憎むべき、あいつらがいないければいいのっていう気持ちの方が強いかな
	羨み	うちの姉が要是買ってもらったわけだよ。で、俺もおんなじやつを持ってるんだけど、やっぱ新しいものを買ってもらえたっていうことがね、すごいね始まったんだよね。で羨ましくて
	好意的感情	やっぱり、自分が、今から思えば本気で好きだったんだだろうなあとは思うけど
出来事に関する感情	アンビバレントな感情	可愛さ余って憎さ百倍なんて、可愛ければ可愛いほど、それが幸せと思えば思ったほど、その裏返しさが、もうすごかったんだと思うよ。で、自分がなんかしてあげれるっていう、そういうしてあげれるっていう世話焼きな分、余計そう思うだろうね。でも結局向こうのことは好きになわけて
	被害感	自分は振られた側で、自分は悪いことをしたわけでもない。むしろ被害者ですよってぐらい
	無力感	暖簾に腕押しというような、何をしてもこの人には効果がないだろうと思わされてきたので、だからもうなにもしたくない、何もアプローチをしたくない。(中略)どの角度からでもあまり深く理解できなかった人なので、その人に何を言っても無駄だろうと
	不公正感	男性トイレ一室しかないから並んで待ってたんだけどさ、そしたら横からおっさんが来てさ、俺先並んでたんだよねとか言ってきたから、すごいそれですごい理不尽だなとかイラッとして
	後悔	思い出していつも思うのは、ほんとになんか言い返せばよかったなって。それをうらみプラス後悔みたいなのがおっきて
	感情表出への抵抗感	そういうの言っちゃいけないような気がしたし、きつと、あんまそういうこと思っちゃいけないような気はしたね、不思議と。そんなの幼いながらのね、幼いながらの、そういうなんか、うらみでくっついて思うような気持ちは
感情処理 の困難さ	原因不明な不快感	その当時はね、大抵ね、何にそんなに苦しかったのかよくわからなかったんだと思う
	感情の制御不能感	もうイライラしてるしかないし、大抵それを抑えられないよね、そういう時って
	感情の消化不良	得てして恋愛はそういうものなのかもしれないけど、相手が自分のことを嫌いになるっていうのは、あのね、なんとなく時間が経つとともに理解ができた。例えば、そんなのよくあるこっちゃ、自分のことを嫌いになるってことは。なんだけど、自分が好きだ、相手のことが好きだっていうこの気持ちをどうしたらいいんだよじゃあみたいなさあ。それがね消化しきれないんだよ
不快感情 の状態	不快感の増幅	考えてさらに怒りが増幅するんだよ、勝手にどんどん
	不快感の持続	うらみって結構怒りよりも長期間の持続になりますよね、だから時間的な経過ですごく大きいような気がして。(中略)その怒りのポイントとかも含めてずーっと積み重なっていつちゃって、1回の良いことじゃ戻せない、何を見ても腹が立つとか、そういうようなすごく長期間のものになってきて、なんかうらみに変わるような感じがしていい
「うらみ」 対象への願望	破壊的・暴力的願望	俺の場合その相手がわからなかったらしいんだけど、もし知ってたらどうなってたんだろうって。もし知ってたらね、そいつを殺すね本当に。木当なんかしたと思うぐらい
	自己主張願望	自分の中では納得はいかないから、言い返したかったかなって思いの方が強い。自分の中で筋を通しておきたかった
	受身的願望	不幸を願う思い 存在・関係性の消滅願望
事後の行動	「うらみ」対象への行動化	むかつくとか、あいつなんか不幸になればいいとか、どんなやつと付き合ってたよとかって、想像ばっかりして、めっちゃめっちゃ腹が立ってて。こうやって考えてるわけよ
	不快感への対処行動	邪魔な対象だよ。いなきやいいの。あいつらいなきやいいのっていう気持ちの方が強かったかな。(中略)和解をしようって思いよりも、あいついなければいいのって
	行動を起こさない	全面対決の方向性じゃないですけど、あんまりこう自分が泣き寝入りしたりとか、つらかった、やりたかったとか、顔を合わせたくないというよりも、全面対決に持ち込むタイプなので、なんかしつかり反論したりとか どうするかって吐き出すしかないから、俺の場合は、みんなに振られましたって言った。(中略)大抵さうやって消化させたのかね 今だったら弁償してくださいってなるけど、何か親に訴えて何か行動に出るとか、そういうことはなかったかな。代わりにその人のものを傷つけるとかもないし。でもそうしなくても、あいつ一つて思ってた記憶はある

関わりが少ない対象] [生活空間が異なる対象] から成る。＜二次の対象＞とは、「うらみ」喚起に関して直接的に関わっていないが、その出来事や一次の対象との関連で「うらみ」の対象となったものである。例えば、自分の姉をいじめた子どもが一次の対象で、その子どもの家族が二次の対象にあたる。前項で、「うらみ」は対象が二者関係を超えて拡大していく恐れがあることについて触れたが、本研究でも対象が＜二次の対象＞に般化する可能性が示唆された。また、関係性がなかった対象へ「うらみ」を向けることも示され（[生活空間が異なる対象]）、「うらみ」は多様な対象に向けられ得るものであると考えられる。

＜欲求不満状況＞は、「うらみ」喚起のきっかけにあたるカテゴリであり、[期待の裏切り]と[被害体験]から成る。[期待の裏切り]とは、自分の要求や期待が先行して存在し、他者がそれに応えてくれない、またはそれを拒絶するような事態を示す。これは甘えや一体感欲求が拒否されて「うらみ」が生じるとされる見解や（土居, 1971；山野, 1989）、「うらみ」喚起の場面として裏切りや拒絶、否定が関連しているという示唆に通ずると考えられる。[被害体験]とは、要求や期待に関わらず、他者によって危害を加えられたり、他者の行動によって損失を被ったりする事態のことを示す。

＜「うらみ」対象への感情＞は、[怒り] [憎しみ] [羨み] [好意的感情] [アンビバレントな感情] から成る。「うらみ」対象に対しては、不快感情だけでなく好意的感情も語られ、『可愛さ余って憎さ百倍』とアンビバレントな感情も抱えていることが語られた。また、近接概念として指摘されていた妬みは抽出されず、代わりに[羨み]が示された。しかし、妬みの構成因子は羨望に相当するため（澤田・新井, 2002）、[羨み]は妬みとほぼ同義であると考えられる。妬みに[被害感]は必須条件ではないが、本研究で示されたように、被害感が伴う妬みが「うらみ」喚起に関連している可能性がある。

＜出来事に関する感情＞は、「うらみ」が喚起された出来事を受けて生じた感情のことであり、[被害感] [無力感] [不正感] [後悔] [感情表出への抵抗感] [原因不明な不快感情] から成る。[原因不明な不快感情]とは、その不快感情がどうして生じているのか、何に対して生じているのかなどが不明確なものを示している。「うらみ」のきっかけとして不当な仕打ちについて指摘されているが、本研究においても[不正感]が抽出された。これより、「うらみ」を喚起させる出来事が不当・不正であるという点は「うらみ」喚起において重要であると示唆されよう。

＜感情処理の困難さ＞は、生じた感情を上手く対処できないことを示しており、[感情の制御不能感] [感情の消化不良] から成る。

＜不快感情の状態＞は、[不快感情の増幅]と[不快感情の持続]から成り、前者は不快感情の強さが増しているが、後者は単に不快感情が長期間続いていることを示している。

＜「うらみ」対象への願望＞は、＜積極的願望＞と＜受身的願望＞から成り、前者は[破壊的・暴力的願望]と[自己主張願望]、後者は[不幸を願う思い]と[存在・関係性の消滅願望]から構成されている。＜積極的願望＞とは何らかの行動を起こしたいという願望であり、＜受身的願望＞とは自ら行動を起こさず、自身の希望を願うものである。

＜事後の行動＞とは、「うらみ」が喚起される出来事が起きた後にとった行動を示しており、[「うらみ」対象への行動化] [不快感情への対処行動] [行動を起こさない]から成る。[「うらみ」対象への行動化]は「うらみ」対象へ向けられた反攻的行動であるが、[不快感情への対処行動]は人に話して感情を消化させるといった、感情に焦点化した対処方略のような側面を持っている。

各カテゴリ間の関係性 抽出されたカテゴリ間の関係性を Figure. 2 に示す。各カテゴリ間の関係性は、＜欲求不満状況＞の違いによって様相が異なっているため、以下では[期待の裏切り]場面と[被害体験]場面に分けて説明する。

まず、[期待の裏切り]場面において、＜「うらみ」対象＞は[生活空間が同じで、関わりが多い対象]であることが見出され、さらに二次の対象へと般化する可能性が示唆された。＜「うらみ」対象への感情＞として、[怒り] [憎しみ] [羨み]といったネガティブな感情だけでなく、[好意的感情]といったポジティブな側面を含む感情も示され、[アンビバレントな感情]を持ち得ることが示された。これは、甘えと恨みが表裏一体であるという見解を示唆する結果であると考えられる。

＜出来事に関する感情＞を含む喚起された感情はうまく処理されず（＜感情処理の困難さ＞）、[不快感情の持続]や[増幅]を招き、さらにそれらを適切に処理することもできないといった悪循環が生じると考えられる。

[感情処理の困難さ]は、特に[アンビバレントな感情]の影響を受けている可能性がある。この[アンビバレントな感情]は相反する感情を同時に持つ複雑な感情であるため、それを処理することは容易ではないと考えられよう。さらに、＜「うらみ」対象＞が比較的關係が多い対象であるため、事後も不快感情が喚起される機会が多

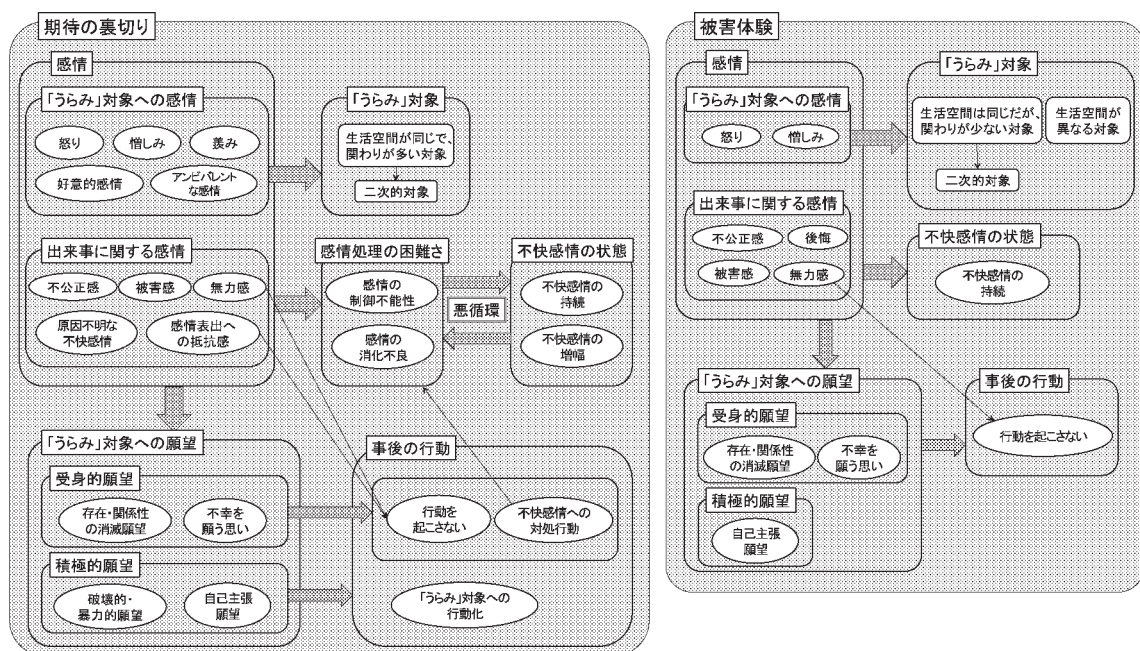


Figure. 2 カテゴリ間の関係性

くなり、[不快感情の持続]や[増幅]が生じると考えられる。そして、こうして生じた悪循環によって、不快感情は自然に解消されにくくなると推測される。

これらの感情が影響して、<「うらみ」対象への願望>が生じると考えられる。例えば、[怒り]や[憎しみ]といった攻撃的感情は、[破壊的・暴力的願望]を引き起こすかもしれないし、[無力感]は[不幸を願う思い]を生み出すかもしれない。

<「うらみ」対象への願望>は<事後の行動>に影響するが、特に<受身的願望>は[行動を起こさない]と[不快感情への対処行動]のみに影響する可能性が示唆された。また、[無力感]や[感情表出への抵抗感]があることから、[行動を起こさない]可能性が考えられる。さらに、[不快感情への対処行動]は<感情処理の困難さ>に影響を与え、適切な感情処理を促す可能性が示唆された。

[破壊的・暴力的願望]は[期待の裏切り]場面においてのみ示されたが、これは暴力犯罪の動機として語られる「うらみ」の背景要因である可能性がある。また、「うらみ」が攻撃行動へと発展することが指摘されているが(郷古, 1976)、実際に行動を起こさない場合もあることが示唆された。

次に、[被害体験]場面において、<「うらみ」対象>として[生活空間は同じだが、関わりが少い対象]と[生活空間が異なる対象]が見出された。<「うらみ」対象へ

の感情>は、[期待の裏切り]場面とは異なり、[怒り]と[憎しみ]というネガティブな感情のみであった。

喚起された不快感情は持続する傾向があり([不快感情の持続])、[期待の裏切り]場面と同様に、<「うらみ」対象への願望>を生み出すと考えられる。しかし、[被害体験]場面においては、<積極的願望>として見られたのは[自己主張願望]のみであった。

これらの願望によって影響を受ける<事後の行動>としては、[行動を起こさない]のみが示された。これは、<「うらみ」対象>が比較的関わりが少い対象であることから、その対象に向けた行動をとることが困難であるためであると考えられる。さらに、<「うらみ」対象>との関わりが少い分、不快感情が増幅する機会も少なく、[期待の裏切り]場面のような悪循環が生じにくい。そのため、目立った<不快感情への対処行動>が見られなかったのではないかと考えられる。

最後に、[期待の裏切り]場面と[被害体験]場面の比較を行う。両場面に通して見られる要素として、[怒り]と[憎しみ]があり、「うらみ」との関連性を報告する先行研究の知見に通ずる結果であると言える。特に、[怒り]の発言数は多く、「うらみ」の中核的感情であることがうかがえる。

[被害感]も両場面において一貫して抽出されており、「うらみ」の重要な要素であることが考えられる。これ

は「うらみ」と他の近接概念を弁別する重要な要素である。また、[被害感]は[被害体験]場面だけでなく、[期待の裏切り]場面においても示されている。[期待の裏切り]場面において、『それまでは自分の気持ちを受け止めてくれました、そこから受け止めてくれませんかということで（中略）この気持ちどうしたらいいの？みたいなさ。全くの利己的なことだね。エゴだと思えないけど』という語りが見られ、期待を裏切られたり要求を拒絶されたりすることで[被害感]を感じるが、それを『利己的』であると認識していることがうかがえる。利己性や自己中心性が強いことにより、[期待の裏切り]場面において「うらみ」を喚起しやすくなるのかもしれない。

5. 今後の課題

「うらみ」の様相を検討するため、先行文献の概観とインタビューデータの分析を行ってきたが、これらを通して「うらみ」研究の今後の課題が見えてきた。

「うらみ」は攻撃行動に発展することが指摘されているが、本研究では必ずしもそうではないことが示唆された。「うらみ」によって攻撃行動に出るか否かに関わる要因はどのようなものであるのか、内的な個人要因や周囲の環境要因を含め検討する余地があるだろう。

本研究においてはカテゴリ化されなかったが、「うらみ」対象の行動の背景が許せるものであれば「うらみ」を持たなかったという語りが見られた。これは、許しが「うらみ」と相反する概念であることを示唆しており、「うらみ」の解消において重要な要因である可能性が考えられる。また、本研究においても[不快感情への対処行動]が抽出されたが、その効果や方略については示されなかった。「うらみ」の解消についても、今後の実証研究において検討すべき課題であると考えられる。

また、「うらみ」に関連する[怒り]や[無力感]は、臨床心理学的問題を引き起こすことが考えられる。制御困難な[怒り]は心身の健康や対人関係の悪化を招き（高橋・高橋・林・長澤，2014）、[無力感]は気分の落ち込みや抑うつに発展する可能性が考えられる。前述した対処方略と共に、「うらみ」に関わる臨床心理学的問題を明らかにしていく必要があるだろう。

「うらみ」とは多様な要素や条件が重なった時に生じる主観的体験である以上に、その一連のプロセス全体を示す概念なのかもしれない。Figure. 2で示されているさまざまな段階で「うらみ」は体験されるが、そのプロセス全体によって「うらみ」は維持されていると考えられ

る。つまり、単なる要素の集まりではなく、段階を含むプロセスによって「うらみ」は形成され、維持されているのではないかと考えられる。今後は、本研究で示唆された観点についてより精緻に検討し、「『うらみ』とは何であるのか」という問いを明らかにしていくことが望まれる。

引用文献

- 荒木博之（1976）．日本人の心情論理 講談社．
- 朝倉隆司（2004）．中学生におけるいじめに関わる役割行動と敵意的攻撃性，共感性との関連性 学校保健研究，**46**，67-84．
- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343-349.
- 土居健郎（1971）．甘えの構造 弘文社．
- Feather, N. T. (2008 a). Effects of observer's own status on reactions to a high achiever's failure: Deservingness, resentment, schadenfreude, and sympathy. *Australian Journal of Psychology*, **60**, 31-43.
- Feather, N. T. (2008 b). Perceived Legitimacy of a Promotion Decision in Relation to Deservingness, Entitlement, and Resentment in the Context of Affirmative Action and Performance. *Journal of Applied Social Psychology*, **38**, 1230-1254.
- Feather, N. T., & Nairn, K. (2005). Resentment, envy, schadenfreude, and sympathy: Effects of own and other's deserved or undeserved status. *Australian Journal of Psychology*, **57**, 87-102.
- Feather, N. T., & Sherman, R. (2002). Envy, Resentment, Schadenfreude, and Sympathy: Reactions to Deserved and Undeserved Achievement and Subsequent Failure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 953-961.
- 福島章（1985）．「うらみ」の精神分析 児童心理，**39**，205-214．
- 郷古英男（1976）．攻撃的犯罪の動機としての「恨み」の考察 犯罪心理学研究，**12**，21-29．
- 郷古英男（1978）．「うらみ」の心理 大日本図書．
- Horney, K. (1937). *The neurotic personality of our time*. New York: W.W. Norton & Company.
- 時事通信社（2016）．元生徒の男、指切断認める＝検察側「パレエ講師に恨み」－東京地裁 時事ドットコム 2016年11月7日<<http://www.jiji.com/jc/article?>

- k=2016110700026&g=soc> (2017 年 2 月 27 日)
- 加藤司・谷口弘一 (2009). 許し尺度の試み 教育心理学研究, **57**, 158-167.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために 中公新書.
- Kuno, A. (1991). The Structure of “Urami”. *Japan Review*, **2**, 117-123.
- 増井金典 (2013). 日本語源広辞典〔増補版〕 ミネルヴァ書房.
- 松村明・山口明德・和田利政 (1995). 古語辞典〔第八版〕 旺文社.
- 宮本真巳 (2012). 否定的感情の意味を吟味することが援助関係にもたらすもの 精神科看護, **39**, 4-12.
- 新村出 (2008). 広辞苑〔第六版〕(机上版) 岩波書店.
- 落合良行 (1994). 青年期における生活感情リストの作成 筑波大学心理学研究, **16**, 119-127.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生における 3 タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響 教育心理学研究, **52**, 298-309.
- 澤田匡人 (2003). 児童・生徒における妬み感情喚起場面の諸側面 筑波大学発達臨床心理学研究, **15**, 57-64.
- 澤田匡人 (2005). 児童・生徒における妬み感情の構造と発達の変化——領域との関連および学年差・性差の検討—— 教育心理学研究, **53**, 185-195.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 児童・生徒用妬み測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, **24**, 219-226.
- 澤田匡人 (2009). 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.160-180.
- 秦一士 (1990). 敵意的攻撃イベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227-234.
- Smith, R. H., Parrott, W. G. Ozer, D. & Moniz, A. (1994). Subjective injustice and inferiority predictors of hostile and depressive feeling in envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 705-711.
- 塩谷治彦 (1997). 現代的いじめについての社会心理学的考察 現代社会学研究, **10**, 132-149.
- 高橋浩子・高橋良博・林潔・長澤里絵 (2014). 怒りの表出と問題解決およびパーソナリティとの関連についての一考察 駒澤大学心理学論集, **16**, 17-22.
- 竹内和雄・戸田有一・高橋知音 (2015). 青少年のスマートフォン&インターネット問題にいかに対処すべきか—社会と教育心理学との協働に向けて— 教育心理学年報, **54**, 259-265.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- Titelman, P. (1981). A Phenomenological Comparison Between Envy And Jealousy, *Journal of Phenomenological Psychology*, **12**, 189-204.
- 山本真理子 (2003). 嫌悪対象者に対する感情の構造 筑波大学心理学研究, **26**, 121-131.
- 山根一郎 (2005). 怒りの現象学的心理学 椋山女学園大学文化情報学部紀要, **5**, 71-84.
- 山野保 (1989). 「うらみ」の心理—その洞察と解消のために 創元社.
- 山崎勝之 (2002). 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編— ナカニシヤ出版, 19-37.
- Yamasaki, K., & Nishida, N. (2009). The relationship between three types of aggression and peer relations in elementary school children. *International Journal of Psychology*, **44**, 179-186.
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子 (2001). 小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要教育科学編, **16**, 1-10.

(指導教員 下山晴彦教授)

付記

本研究は、文部科学省科学研究費の基盤研究 A (課題番号 16 H 02056) の助成を得て行われた。